

「夏休み前のオクラ」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

3年生は、5月にオクラの種まきをした。もっと早くまいたほうが良いのだが、本校では家が遠い子どもも多いので、あまり育ちすぎると、夏休み前に持ち帰るのが大変なのだ。



「オクラの種子」 硬くて小さい。子どもたちはこの種をもらった時に、こういう種子がたくさんできて、種子そのものを食用にするのだと勘違いしていた者もいた。「硬くてまずそう」なんて言っていた。



こんな状態でも、子どもたちは毎日1~2回、せっせと世話をしている。「一人一鉢効果」である。朝登校してすぐ、中休み、昼休み、それに帰りの会の前には、小さな水のボトルを持って、水やりをする子どもたちの姿が、必ず見られる。



台風の通過で心配だったが、幸い折れたり倒れたりした苗はなかった。そんな中、今朝、やっと花が咲きだした。写真は夕方ですでにしぼんでしまっているが、確かにいくつかの花が確認できた。オクラは花が咲いて花弁が落ちると、あっというまに結実する。その後、次々と実ができて、何カ月も収穫ができる。



鉢を置いた場所も、3年生のベランダで、日当たりもあまり良くなく、7月に入っても発育が悪い。どれもこれもひよろひよろである。しかし、家に持ち帰るのには、誠に都合の良いサイズといえる。これでも持ち帰って日当たりの良い場所に置くと、ぐんぐん育つ。

夏休みには、オクラの成長を観察しながら、収穫や調理も楽しめる。また、果実を収穫せずに放置すれば、そのまま熟して、大量の種子を採ることも可能だ。さまざまな観点で、やはりオクラの教材性は高い。教科書に載るだけの価値は十分にある。